

新聞を読む楽しさと意義を実感させる実践（英語）

兵庫県立山崎高等学校 校長 西川 茂樹

教諭 上本 善之

1. はじめに

兵庫県立山崎高等学校は、兵庫県宍粟市に位置し、創立 108 年の伝統を誇る地域の中心校である。森林環境科学科（林業）、生活創造科（家政）、普通科の 3 学科を有し、県下でも数少ない専門学科と普通科が併設されている全日制の高等学校である。

本校は、平成 25 年度より NIE 実践校の指定を受け、本年度は 2 年目の実践となる。前年度は、「読解力と語彙力の養成を目指した実践」と銘打ち、新聞のコラムの 100 字要約、英和辞典を活用した英字新聞の読解授業に取り組んだ。結果、一定の読解力や、文章を読む習慣を定着させることはできたが、「新聞の情報を読み取る段階にとどまり、読み取った情報から自分の考えを述べるまでには昇華できなかつた」という課題が残った。

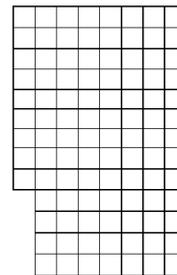
従って、本年度の実践では、昨年度の実践内容を引き継ぎつつ、新聞記事に対する自分の意見を考えさせるように心掛けた。言語習得の基本はインプットとアウトプットの繰り返しであるが、考える力の養成にも、同様のプロセスが有効である。やはり、「読む楽しさ」を味わうためには、読んだ内容に対して、自分の意見を考え、アウトプットする機会を設けなければならない。

また、昨年度はできなかつた新聞記者派遣も実施できた。

2. 取り組みの概要

(1) 学年としての取り組み

当該学年では NIE 実践校の指定を受ける以前より、朝学習として、新聞のコラム要約に取り組んできた。生徒の要約した文章を各ホームルーム担任が添削し、返却後、コラム要約用のファイルに保存させている。



コラム要約 NO.31
改訂版(2019年)発行の「英語」の教科書(文芸春秋)に掲載されている「コラム」の要約用紙です。この要約用紙は、生徒が新聞のコラムを読み、その内容を要約して記入するためのものです。右側の文章は、この要約用紙に記入された生徒の要約文の一例です。文章の内容は、日本の経済状況に関するもので、GDPの伸び率が鈍化していること、政府の政策が効果的でないこと、そして今後の見通しについて述べています。文章の最後には、「(正解) 10月18日 文芸春秋」の記載があります。

2 年目ということもあり、生徒も慣れ、短時間でうまく要点をまとめられる生徒も増えた。次年度は進路実現の年であり、この取り組みの成果が、現代文読み取りや、小論文で生かされることを期待する。

(2) 教科としての取り組み

本校の学校設定科目「文理科学基礎」の授業内で、英字新聞を活用した授業を行った。昨年度は英和辞典を活用し、「語彙力をつける」ことを狙いとしていたが、今年度は「読み取った情報に対して、自分の意見を考える」ことに主眼を置いた。次ページはその指導案と、授業の様子である。

第2学年 文理科学基礎 (NIE) 指導案 (略式)

1 題材 “2014: A year of triumphs and deadly strife”

MAINICHI WEEKLY (12/27/2014)

2 対象 2年6組 男子23人 女子17人

3 日時 平成27年1月20日(火) 6時間目

4 授業の狙い

- (1) 2014年の主要なニュースを英語で読むことにより、英語を「教科」としてではなく、日常的に情報を入手するための「手段」とであると認識する。
- (2) 読み取った情報に対して自分の意見を考えることにより、読む楽しさを実感させる。
- (3) 辞書を活用して、情報を適切に読み取ることができる。

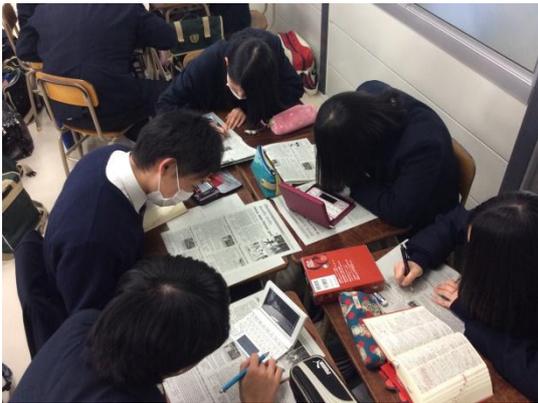
5 評価の観点

① 関心・意欲・態度	② 思考・判断・表現	③ 技能	④ 知識・理解
------------	------------	------	---------

6 指導過程

段階	時間	活動内容	指導上の留意点	評価
導入	5分	昨年度の気になるニュースについて、英語で発問を行い、生徒の関心を引き付ける	展開で扱う記事への興味を高めるため、できるだけ多くのニュース情報を引き出す	①④ 英語の Oral Introductionの内容を理解できているかどうか
展開	42分	8つの班に分かれ、10ある記事のうちから1～2個興味のあるものを班別を選び、内容を読み取る	机間巡視中、教師からの指導は全て英語で行う	①②③④ 積極的に読解活動に取り組んでいるか
		自分たちの班が読み取った内容について、他の班に発表する。その記事の内容について、個人で意見を考え、ワークシートに記入する	聞いた内容に対して、要約ではなく、自分の意見を考えるように指導する	①②④ 他の班の発表に耳を傾けているか。しっかり発表できているか
		それぞれの記事に対する自分の意見を班内で発表し、共有する	意見共有がスムーズにいくように机間巡視で指導する	①②④ 班員の発表に耳を傾けているか
まとめ	3分	ワークシートを提出する	生徒の意見に対する教師の意見を書いて返却する	①④ 活動に積極的に取り組んでいたか

活動の様子



各グループでの活動では、辞書を活用しながら、互いに協力し、意欲的に課題に取り組んでいた。昨年度の実践でも感じたことだが、英字新聞の記事は教科書よりも語彙レベルがかなり高いにも関わらず、生徒の取り組みは教科書と遜色が無い、それ以上である。ここでその理由を考えてみたい。英字新聞と教科書の違いとして、素材の新しさが挙げられる。教科書も比較的新しいトピックを追いかけているが、どれだけ新しくても、世間で話題となった時期からは2～3年の遅れがある。対して、英字新聞の内容は、まさにテレビのニュースなどで話題になっているものが多く、生徒にとってより身近で、興味を持って取り組める。その結果、あるニュースについて、すでに自分なりの見解を持っていることも多く、

感想を述べたり、意見交換したりする活動も円滑に進む。また、本時に扱った新聞記事には、イラクとシリアの紛争 (ISIS) に関するものも含まれていたが、こういった内容は教科書で扱うには宗教色が強過ぎる。また、仮に教科書で扱われたとしても、話題性が薄れていれば、関心も薄れ、内容が難しいだけに生徒に取り組ませるのは困難になる。素材は新しく話題性の高いものほど、より難しい内容でも生徒の興味・関心を維持できることが、本実践を通して実感できたことの一つである。そういった意味で、英字新聞というのは、「読む楽しさ」を実感させるために、非常に優れた教材となり得る。

生徒の各ニュースに対する意見・感想も、こちらが想定していた以上に深く、よく考えられたものが多かった。活動に取り組む生徒の笑顔を見て、本実践の目的は多少なりとも達成されたと感じた。

(3) 記者派遣の取り組み

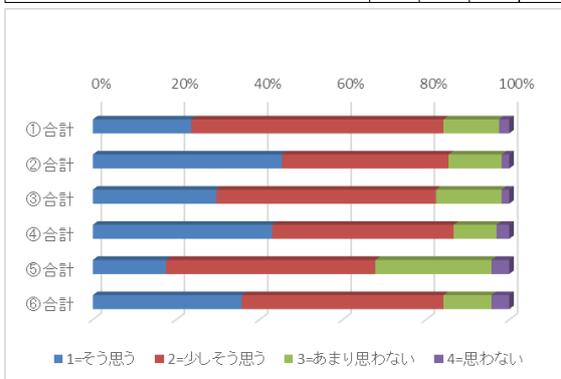
6月24日(火)に新聞記者派遣事業として、県 NIE 推進協議会の山崎整氏に「進路に役立つ新聞の効果的な読み方」と題し、2年生180人を対象に講演を依頼した。本校生は、ほとんど新聞を読む習慣の無い生徒も多く、少しでも自分の意思で新聞記事を読むための動機付けとなることを期待した。話の中で、「スマホのニュースでは自分の興味ある内容しか確認しない。新聞の見出しを流し読めば、社会的常識が分かる」、「時事は面接でも大事だが、英語の入試長文にも時事的英文は頻出する。背景知識の力は大きい」、

「対人関係、コミュニケーションでは、話のきっかけとなるものが必要となる。世間の話題に敏感に」など、生徒にとっての新聞のメリットを、具体例を交えながら数多く提示していただいた。講演会後のアンケートの結果を以下に示す。

NIE 記者派遣講演会アンケート

今日の講演会を開いて、以下の質問に対し、該当する番号に○をつけて下さい。
(1=そう思う 2=少しそう思う 3=あまり思わない 4=思わない)

①以前よりも新聞に対する興味が沸いた。	1	2	3	4
②新聞が必要とされる理由が理解できた。	1	2	3	4
③新聞のチェックしておくべきポイントが分かった。	1	2	3	4
④進路を考えた上で新聞は役に立つと実感できた。	1	2	3	4
⑤以前よりも朝のコラムに取り組む意欲が沸いた。	1	2	3	4
⑥講演を受けて、少しでも新聞を読んでみようと思った。	1	2	3	4



⑤以外の項目で、80%以上の生徒が肯定的な意見を持っていることから、本講演は成功であったと言える。

(4) NIE コーナー設置の取り組み

授業等で使用した英字新聞は、自由に生徒が閲覧できるように、図書館に設置した。



新しい英字新聞の設置



古い英字新聞のストック

図書館は、主に3年生が学習場所として使用していたため、受験に役立ててもらい狙いで設置した。しかし、面接などの時事問題対策といった情報収集目的では、母語である日本語の方が圧倒的に情報収集効率が高いため、あまり英字新聞を広げている光景は見られなかった。合格後の自主勉強として持ち帰りを希望する生徒はいたが、効果は限定的であったように思う。

3. 実践の感想と今後の展望

2年前、NIE 実践校の指定を受け、英字新聞を扱い始めた当初は、新聞記事の内容と生徒の英語力との乖離から、不安を覚えつつの実践であった。しかしこの2年で、生徒の成長はもちろん自分自身も、生徒の興味・関心をいかに引き出すか、という点において成長できたと思う。

昨年度の課題であった「読み取った情報から、自分の考えを述べる」といったことも、本年度は改善することができた。実践終了後も、本校では1種類ではあるが英字新聞を採用しているので、折に触れ、新鮮な情報で生徒の興味を引く授業を展開していきたい。